

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

勝池レポート      アジア資産運用アドバイザー   勝池和夫

「香港について①～香港は死んだのか?～」

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

香港では昨年 6 月に施行された香港国家安全維持法違反の容疑で、民主活動家や民主派議員などが相次いで逮捕されました。市民の間には諦めムードが漂う中、これでビジネスハブと金融センターとしての「香港が死んだ」との見方が広がっているようです。

私がこの「香港の死」という暗い未来を予感させる言葉を聞くのは今回が 2 回目です。添付の写真は、私が香港駐在の時に購入した 1995 年 6 月 26 日発行のビジネス誌「FORTUNE」の表紙です。そのタイトルの” The Death of Hong Kong” で、私は初めてその言葉を聞きました。「すぐに北京がそのやり方を変えなければ、グローバル・ビジネスセンターとしての旧植民地の余命はいくばくもない」という内容の記事ですが、1997 年 7 月 1 日に中国に返還された香港はその後死んだのでしょうか? 北京のやり方はより厳しいものになったようですが。

少なくとも香港証券取引所の代表的な株価指数であるハンセン指数の動きを見る限り、香港経済は中国への返還後、死ぬどころか更に発展したと言っていると思います。同指数は、この雑誌の発行日から今年の 2 月 18 日までの凡そ 26 年間に、232% 値上りしました。その間には中国への返還だけでなく、アジア通貨危機、SARS の発生、チャイナショック、民主化デモなど数多くの悪材料があったにもかかわらずです。因みに、同じ期間の我が国の日経平均の上昇率は、アベノミクスに囃されても、日銀がいくら ETF を買っても、30 年半ぶりに 3 万円台を突破しても、107% でした。

では、今回の「香港の死」の予感は当たるのでしょうか?

香港はよく「東洋の真珠」と呼ばれていたもので、私は香港経済の行方も真珠に譬えて考えていました。こんな感じです。元々香港は一つの小さな真珠の粒でした。その粒が中国経済の発展を受けどんどんと層を厚く、そして輝きを増していききました。更に今度は中国広東省の珠江デルタの深センなどの都市やマカオに、恰も真珠のネックレスのように高速鉄道や大橋などによって繋がっていく、というイメージを持っていました。

そしてこのイメージは、下の地図が示す中国政府が力を入れるグレイターベイエリア (大湾区) 構想と似ています。でははたして、これからの中国経済の命運を握るとも思われるこの経済圏構想に組み込まれた香港は上手くやっていけるのでしょうか?

今から17年前になりますが、シンガーソングライターの松任谷由美は雑誌のインタビューで、香港の魅力について次のように語っています。少し長いですが引用します。「中国の文化ってね、足を向けて寝られないほど古代から日本人の身体の中に入り込んでいる。それがイギリスのシノワズリになっているところが魅力ですね。たとえヨーロッパのブランド品であっても、香港で手に取るということ自体に、アジアの良さ、楽しさを味わえる。モノに対してお金を払うだけじゃなく、シチュエーションが楽しいわけで。そういうものが、どんなことが起こっても香港には脈々とあるな、と思います。」

やっぱりユーミンの感性は鋭いと思います。その辺の藪にらみの学者や評論家とは違いますね。

私も香港は、たとえ中国の真珠のネックレスの一部になっても、来るアジアの時代にまだまだ楽しいシチュエーションがあるのではないかと感じています。

1995年6月26日発行の「フォーチュン」



グレイターベイエリア構想

